

特集

父から子へ

「長い線の一部」として
生きる。

鵜匠が語る、承継。

岐阜の夏の風物詩、鵜飼。1300年以上の歴史を誇るこの伝統を守り続けてきた鵜匠の一人、山下 哲司氏。1987年に鵜匠に就任されました。いま、「承継」の大きな節目を迎えています。不慮の怪我をきっかけに見つめ直した、息子への事業承継の在り方。伝統という名の「長い線」の一部として、言葉なき伝統の受け継ぎ方、代々繋いできた「誇り」の在り方など、静かで確かな想いを伺いました。

——1300年の歴史を背負う鵜匠の世界。「承継」ということについて、山下さんはどう考えられていますか。

山下 一般的には、何歳を超えたから、などといった年齢や決まりに従うものがあるわけでしょうけれど、私たちは基本的には「体力」。自分が「もうあかん」と、自分で判断したらバトンを渡すというのが前提でしょうね。私たちの場合は、親父が亡くなって急に代わるパターンもあれば、「そろそろ交代してくれ」というパターン

ンもあります。しかし、やはり自分の体力の限界をどう判断するか。息子に継がせる判断基準は、そこしかないと思っています。

——具体的に、その「節目」を感じることはありましたか。

山下 実は昨夏の鵜飼期間中に、左手を骨折しました。「左手」は、鵜匠にとって命です。手縄を握る握力もなくなり、無理だと判断しました。それで、息子に急遽やってもらうことにしました。息子が鵜舟の「鵜匠」の位置(真ん中)に座って、私は一歩引いたところで見

いましたが、お客さんが一生懸命「たつちゃん(息子の名前)頑張れよ!」って応援してくれましてね。ああ、これはすごいなと。引き継ぐというのは、こういうものなのかな、という気持ちになりました。

——繋ぐきっかけに迷うなか、「周りの応援」が背中を押してくれたのですね。

山下 そう。「いつバトンを渡せばいいか」、そのきっかけがなかなか掴めなかったのですけれど、いざという時、本人が「やる」という気持ちでいてくれたのはありがたいことです。私自身も、親父からは「継げ継げ」とは言われませんでした。周りからはいつもそう見られていました。父の存在が大きすぎたのでしょう。その次を、その跡を継ぐというのに、なんとなく嫌な気持ちもありました。それがいつしか「父は父、僕は僕。あえて父の真似をする必要はない。自分も、先人から続く『長い線』の一部なのだ」と考えられるようになり、それから楽になりました。この線を自分の代で止めるわけにはいかない。「自分は自分」として、鵜匠を継ぐのだ、という発想に変わったのです。息子も、私が直接「継げ」とは言わなくても、

そういう空気を感じ取って責任感、プライドを持ってくれているのだと思います。

「教わる」のではなく
「自分の体で覚える」

——技術的なこと、例えば「技」などは、どのようにお子さんに教えられているのですか?

山下 技というのは、「口承」と言っていて、一から十まで教えるものではないのです。どこの鵜匠家でも教えていません。「見て覚える」「体で覚える」というのが基本。例えば、舟と一緒に乗って、鵜匠がどう汗をかき、どう動いているか。その仕草を見ることで、頭に叩き込む。本来はそうあるべきなのです。そのための心構え、何より「プライド」をしっかり持つこと。技に対しては、見て覚えたことを自分の体を使って実際にやってみる。もちろん、頭での感覚と実際は全く違う。私の場合は、父が急に逝ってしまったので聞くことは全くできませでしたが、体力の限界で交代するなら、息子には多少のアドバイスはできるかもしれません。しかし基本は、「自分の体で覚える」しかないのです。



鵜匠 山下 哲司氏

聞き手 統括責任者
古川 真一郎岐阜商工会議所
岐阜県事業承継・引継ぎ支援センター

——「ぶっつけ本番」で覚えられたと伺いました。

山下 そう、練習なんてありません。5月11日の解禁までは川に鵜を入れてはいけないのが前提です。私の時は、父が亡くなった翌年の解禁日が「初舞台」でした。体では全く覚えていないことばかりで、最初は必死でした。薪をくべるタイミングも、見ていた時とは全然違う。手縄たなづなをさばくのも、一生懸命やればやるほど、もつれてさばけなくなってしまう。それでも、何が何でもやらなければならないと無我夢中でした。そんな中で、だんだん体得していったのです。

鵜は「パートナー」であり「家族」

——鵜との向き合い方について教えてください。

山下 鵜は、一羽一羽、性格が全然違います。おっとりした鵜もいれば、そうでない、いろいろなのです。毎朝起きて、カゴから出して「元気かな」とさすってみます。水はけがいいのは元気な証拠、悪いのは疲れているかな、という目安になります。ただ、一羽だけを可愛がりすぎてもいけない。野生

をなくして、甘えて休みたくなってしまうから。全部に目を見張らせるのが大事。昔は鵜匠が惚れ込んだ鵜に「彦丸」と名前をつけることもありました。けれど、今は特定の鵜だけでなく、チームプレーとして全体を見ています。これは今の会社で従業員をどう使うか、という話にも通じるかもしれませんね。

——長い歴史の中で、皇室の方々をお迎えすることもあります。

山下 昭和、平成と、天皇陛下をお迎えする「天覧」もありました。我々は宮内庁の職でありますので、「御視察」に来ていただくという気

持ちでもあります。安全を第一に、無理をせず、それでも素晴らしい鵜飼を見ていただきたいと心から思っています。提灯行列で地域の皆さんにも喜んでいただいた姿は忘れられません。

——最後に、山下さんにとって「鵜匠」とは。

山下 仕事上で「辛い」と思ったことはないです。体力がなくなるのは辛いですけどね（笑）。自分が引き継いだこの「流れ」を、次の代へ繋いでいく。伝統を守りながらも、自分なりのやり方で、誇りを持って続けていく。それが一番大切なことだと思っています。



岐阜県事業承継・引継ぎ支援センターは、事業承継でお悩みの中小企業や個人事業主の皆さんを支援する相談窓口です。専門の知識をもつ相談員たちが、親切・丁寧にお応えします。お気軽にお問合せください。

Tel.058-214-2940